

平成23年度教職大学院派遣研修研究報告書

研修生番号	23K16	氏名	丁山 永芳
研究主題 —副主題—	「文学的な文章」における読みの力を育成するために —学習内容の焦点化を図った学習過程—		
所属校	国立市立国立第三小学校	派遣先	東京学芸大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	<p>1) 本研究の目的 本研究は、小学校・高学年国語科の「文学的な文章」における学習内容とは何か、身に付けさせるべき読みの力とは何かを明らかにするとともに、その指導方法を提案することを目的としている。</p> <p>2) 主題設定の理由 文部科学省(2005)は、「読解力向上プログラム」において『「文学的な文章」の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め」とある。その背景として以下3点を鶴田(2010)は指摘している。 (1)「文学的な文章」における授業で何を教えてきたのか。 (2)どの学年においても同じような学習過程であった。 (3)特に、登場人物の心情や場面の様子の読み取りでは、何時間もかけてやってきた。 また、学習指導要領が改訂(2008)され、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」を基本的な考え方として示され、その「改善の具体的事項」の内容として「学習過程の明確化」や「学習の系統性の重視」等も示されている。さらに、「目的に応じて複数の本を選んで読むこと」や「比べて読むこと」の意義を示している。 以上のことから次の三点『①学習内容の明確化、②学習過程の明確化、③一単元複数教材』を本研究の柱とし、その可能性を明らかにすることで、上記の課題を解決できるのではないかと考えた。</p>
II 研究の方法	<p>1) 「文学的な文章」を取り上げた授業の先行研究の検討 「文学的な文章」において、授業のねらいが曖昧であると言われる問題を解決するために、「文学的な文章」における授業で児童に何を学ばせ、どんな読みの力を身に付けさせるのか、「学習内容」について先行研究を考察する。</p> <p>2) 検証授業について</p> <p>①検証授業の構想 単元で使用する教材(以下「主教材」とする)以外の教材を使用(以下「副教材」とする)し、学習過程の導入部分に副教材を位置付け、「学習内容」を焦点化する。それは、児童の学習課題の自覚化を促し、また、学習内容の理解を深めるための学習過程であると考えた。具体的には、副教材『おてがみ(アーノルド・ローベル作、三木卓訳)』を主教材『やまなし』の導入部分(第一次)に位置付けた学習過程の授業研究プランを作成し、その有効性や課題について検証授業を行う。</p> <p>②検証授業の考察についての視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入部分(第一次)における学習課題「なぜ、題名が『おてがみ』なのか」において「登場人物と題名」に着目し、書かれていることを手がかりに登場人物の心情やつながり、主題等、どのように読んでいるか。つまり、「学習内容」を理解しているかを考察する。 ・展開部分(第二次 1/5)における学習課題『「やまなし」を読み、感想を書こう』において、『おてがみ』と比べながら読み、『やまなし』の特性を理解することや、題名に着目し、学習課題の自覚化が窺える内容であるかを分析・考察する。 ・展開部分(第二次 5/5)における学習課題「なぜ、題名が『やまなし』なのか」において第一次で身に付けた読みの観点を生かしてどのように読んでいるかを分析・考察する。

<p>Ⅲ 研究の結果</p>	<p>1) 文学的な文章の授業における「何を」の重要性 これまで不明確であった「文学的な文章」における授業の学習内容については、鶴田 (2010) の先行研究が重要である。本研究にかかわる鶴田の提起で重要なことは、学習内容を【教材内容】【教科内容】【教育内容 (ここでは省略)】の区別をしたことである。 【教材内容】とは、これは教材固有の内容をさす。作品名と作者名はもとより、表現されている内容 (筋・人物・場面・事件・主題など) について理解させることを目指す。 【教科内容】とは、各教科の基礎となっている学問の体系 (知識・技術) が指導事項の中心になる。国語科 (文学領域) で言えば、文学表現の原理・方法およびそれに基づいた「読みの技術」 (以下「読みの観点」とする) がそれにあたる。【教材内容】よりも一般的・法則的な内容である。</p> <p>2) 検証授業より</p> <p>①導入部分『おてがみ』の題名設定理由の記述より 「がまくん」は手紙をもらってうれしい気持ちになったから。(=登場人物の心情の変化) や「かえるくん」と「がまくん」の仲がより深まったから。(=登場人物同士のつながりの変化) に見られるように文章に書かれてはいないが、書かれていることを手がかりに推論している。つまり、児童は登場人物の変容を題名設定の理由として捉えており、抽象的な意味で理解している状態と言える。また、「作者は“おてがみ”を通して、友情の大切さを伝えようとしているから。(=主題)」や「題名の“おてがみ”は、“かえるくん”の思いやりを表そうとしているから。(=象徴性)」に見られるように登場人物の変容と作品全体を関連付けて題名設定の理由として捉えている。児童は非常に抽象度の高い意味で理解している状態と言える。 以上のことから、登場人物の変容という「読みの観点」をもつことができたと考える。</p> <p>②展開部分『やまなし』の感想記述より 『やまなし』の特性を捉えた内容の感想が多く見られた。例えば、「表現の工夫、情景」に関する記述が見られた A さん感想では、「最初は比喩表現がたくさんあってあまりよく分からなかった。でも、何回か読み返してみると、前の表現などが使われていることに気付いた。感想はとても神秘的な感じがした。文中に書いてあることを想像してみると、とても素敵な風景だなと思った。また、筆者は身近なものをうまく例えられていてすごいと思った。これはカニたちの日常なのかもしれないけれど、とても透き通っている感じがした。」とある。非常に『やまなし』の特性を捉えている状態と言える。</p> <p>③展開部分『やまなし』の題名設定理由の記述より 「かにの兄弟の心と体の成長させたもの (=登場人物の変容)」や「かにの兄弟が仲直りしたり、親子のきずなを深めたりしたもの (=登場人物同士のつながりの変容)」等、児童の記述より、第一次の『おてがみ』と同様に書かれていることから推論し、抽象的な意味で理解している状態と言える。つまり、『おてがみ』で身に付けた「読みの観点 (=登場人物の変容)」を生かしたと言える。また、「“やまなし”のおかげで川の様子が盛り上がったから。」のように児童は、情景の変化を題名設定の理由を捉えている。これまでになかった新たな「読みの観点」であり、非常に抽象度の高い意味で理解している。</p>
<p>Ⅳ 考察</p>	<p>1) 研究のまとめ 今回の研究を通して、先行研究より「文学的な文章」における学習内容が明確になり、学習過程の明確化を図ることができた。また、検証授業では、一単元に複数の教材を位置付けることで教材の特性を理解したり学習内容の定着を図ったりすることにおいて有効であると考えられる。さらに、教科内容である「読みの観点」を焦点化することを足がかりに児童は新たな「読みの観点」を見いだしていくことが分かった。「文学的な文章」における読みへの児童の可能性を実感することができた。</p> <p>2) 残された課題 今回は限定的に単元を構想し、検証授業を行った。そこで取り上げた「読みの観点」について学習指導要領や年間指導計画に基づいて低学年・中学年も含めて系統的・段階的に適切だったのかを見直す必要がある。また、「一単元複数の教材」を取り上げるために年間指導計画に即して、どういった教材が適切なのか考えていく必要がある。</p>